

## 学位論文審査結果の要旨

博士課程 ①・乙	第433号	氏名	小村 浩史
審査委員		主査氏名	黒田 嘉紀
		副査氏名	中里 耕光
		副査氏名	菅野 敏行
<p>[論文題名] Gender difference in relationship between body mass index and development of chronic kidney disease : BMC Research Notes 2013,6:463</p> <p>[要旨] [背景] 慢性腎臓病 (CKD) は末期腎不全の危険因子であるのみでなく、心血管疾患、脳血管疾患の危険因子でもある。近年、CKD 対策の必要性が強調されており、CKD への発症進展を防ぐための疫学的対策が求められている。本研究では、地元自治体の一般住民を対象に CKD 発症と関連する因子を同定することを目的として、後ろ向きコホート研究にて検討した。[対象と方法] 平成11年度に宮崎県清武町の健康診断を受診した住民 1876 名を対象に、血清クレアチニン値と年齢をもとに日本腎臓学会推算式より推算糸球体濾過量 (eGFR) を算出し、<math>eGFR &lt; 60 \text{ ml/min/1.73m}^2</math>、または随時尿で蛋白尿 +1 (30mg/dl) 以上を CKD と診断し、CKD を認めなかった住民 1506 名 (男性 473 名、女性 1033 名、平均年齢 <math>58.2 \pm 11.0</math> 歳) をその後 10 年間、毎年の健康診断受診時に CKD 発症の有無について追跡調査した。[結果] 10 年間の追跡期間中に、男性 167 名 (35.3%)、女性 299 名 (28.9%) が CKD を発症し、男性が有意に高頻度であった (<math>P &lt; 0.05</math>)。CKD を発症しなかった群と CKD を発症した群を比較すると、CKD を発症した男女ともに、年齢、収縮期血圧、血清クレアチニン値、BMI が高値であり、女性では肥満の頻度が高値であった。 Kaplan-Meier 解析では、男性の肥満群と非肥満群の CKD 発症に有意差はなかったが、女性の肥満群の CKD 発症は、非肥満群と比較して高頻度であった (<math>P &lt; 0.01</math>)。CKD 発症に関連する因子を、Cox 比例ハザードモデルを用いて解析したところ、男性では、年齢と血清クレアチニン値 (<math>P &lt; 0.01</math>) が有意な因子であり、女性では、年齢と血清クレアチニン値 (<math>P &lt; 0.01</math>) に加えて、BMI (<math>P &lt; 0.05</math>) が CKD 発症と有意に関連する因子であった。[結語] 今回の研究で、女性の BMI 高値は CKD 発症の因子である可能性が示唆されたことから、女性の CKD 発症予防のためには、肥満対策も重要であると考えられた。</p>			